

東京藝術大学 奏楽堂 モーニング・コンサート Morning Concert

第 1 回

2026年 5 月21日(木)

指揮：現田茂夫

藝大フィルハーモニア管弦楽団

高橋賢一郎（トランペット）

トマジ：トランペット協奏曲

有川信平（ピアノ）

プロコフィエフ：ピアノ協奏曲第2番 ト短調 作品16

19：45開演 東京藝術大学音楽学部第6ホール

主催：東京藝術大学音楽学部・東京藝術大学演奏芸術センター

◆高橋賢一郎（4年：トランペット）TAKAHASHI Kenichiro

トマジ：トランペット協奏曲（演奏時間約16分）

2004年生まれ。10歳よりトランペットを始める。愛知県出身。

東京藝大ジュニアアカデミー修了後、東京藝術大学音楽学部附属音楽高等学校を経て、東京藝術大学音楽学部管打楽器専攻4年次に在学中。14歳でソリストとして藝大フィルハーモニア管弦楽団と共演。東京藝大青葉の風音楽賞受賞。第24回日本ジュニア管打楽器コンクール高校生コース第1位、第32回日本クラシック音楽コンクール高校生部門 第1位、第4回愛知トランペットコンクールプロフェッショナル部門第1位。

第72回ARDミュンヘン国際コンクール二次予選進出。

これまでに、栃本浩槻、佐藤友紀、菊本和昭、井川明彦、星野朱音、赤堀裕之史の各氏に師事。



フランスの作曲家 アンリ・トマジ（1901～1971）は、コルシカ島にルーツを持ち、マルセイユに生まれた。パリ音楽院で学び、指揮者としても活躍する一方、印象主義以降のフランス音楽に、ジャズや民族的要素を融合させた独自の作風を確立した。「常に旋律を愛する」と語った彼の音楽は、色彩豊かな管弦楽法と強い叙情性を兼ね備えている。

本日演奏するトランペット協奏曲は1948年に作曲され、翌1949年にパリで初演された。当時パリ国立歌劇場管弦楽団の首席奏者であったリュドヴィック・ヴァイヤンに献呈された本作は、古典的な協奏曲の形式を踏まえつつも、20世紀的な和声やリズムを取り入れた新古典主義的作品であり、現在ではトランペットの重要なレパートリーとして広く知られている。

第1楽章 Allegro et Cadence

全合奏による鋭い一撃で劇的に幕を開け、トランペットが華やかに主題を提示する。ファンファーレ的な動機と、ミュートを伴うブルース風の旋律が対比的に現れ、楽章全体を通して展開されていく。技巧的で機動力の高いパッセージが続く中、後半には大規模なカデンツァが置かれている。ここではスネアドラムの規則的なリズムの上でトランペットが自由に歌い、時に鋭く、時に幻想的な表情を見せる。伴奏と独奏の対比が強い緊張感を生み出し、この楽章の大きな聴きどころとなっている。終結部では神秘的な響きを残しつつ、静かに閉じられる。

第2楽章 Nocturne. Andantino

静謐で夢幻的な夜想曲。ミュート付きトランペットによる子守歌風の旋律が、ハーブや弦楽器の繊細な響きに支えられながら歌われる。中間部ではオーケストラ全体へと広がり、さらにフルートやチェレスタの透明な音色が加わることで、幻想的な空間が描かれる。再び冒頭の主題が回帰し、安らぎに満ちた雰囲気の中で楽章を閉じる。

第3楽章 Finale. Giocoso. Allegro

軽快で陽気な終楽章。リズムカルで親しみやすい主題が展開される中、時に意表を突くアクセントや拍のずれがユーモラスな効果を生み出す。ジャズや舞曲的要素も感じさせる活気ある音楽が続く、中間部ではより叙情的で広がりのある旋律が現れることで楽曲に深みを与える。終盤に向かって加速しながら、輝かしく全曲を締めくくる。

本日はモーニング・コンサートにお越しくださり、誠にありがとうございます。トランペットの多彩な魅力が凝縮されたこのトマジの協奏曲を、このような舞台で演奏できることを大変嬉しく思っております。指揮の現田茂夫先生、藝大フィルハーモニア管弦楽団の皆さま、日頃より温かくご指導くださる先生方、本公演のためにご尽力くださったスタッフの皆さま、そして本日ご来場くださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

（高橋 記）

◆有川信平（4年：ピアノ） ARIKAWA Shimpei プロコフィエフ：ピアノ協奏曲第2番 ト短調 作品16（演奏時間約30分）

福岡県出身。

福岡県立修猷館高等学校を経て、現在東京藝術大学音楽学部器楽科ピアノ専攻4年次に在学中。

第21回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA高校生部門アジア大会金賞及びソリスト賞受賞。第73回全日本学生音楽コンクール高校の部北九州大会第2位。

第40回飯塚新人音楽コンクール第3位。第2回世田谷音楽コンクールF級金賞。

第37回アルペン国際ピアノコンクール第2位（イタリア）。第4回チェルヴィニャーノ国際音楽コンクール第1位（イタリア）。サヴォーナ国際音楽祭に招かれソロリサイタルを行う。

これまでにピアノを吉村涼子、齋藤美代子、徳あおい、迫昭嘉、御邊典一、黒田亜樹、實川風の各氏に師事。



セルゲイ・プロコフィエフは1891年、ロシア帝国（現ウクライナ）のソンツォフカに生まれた。幼少期から音楽的才能を発揮し、サンクトペテルブルク音楽院で作曲やピアノを学んだ。若くしてピアニスト・作曲家として注目を集め、その革新的で挑発的とも言える作風により20世紀を代表する作曲家の一人となった。国外での活動を経て晩年は祖国に戻り、多くの作品を残して1953年にその生涯を閉じた。

《ピアノ協奏曲第2番 ト短調 Op.16》は、彼がまだ若き学生であった1913年に作曲された、きわめて革新的かつ挑戦的な作品である。初演当時、その斬新さと激しさゆえに聴衆に衝撃を与えたと伝えられている。その後、原稿はロシア革命の混乱の中で失われてしまうが、1923年に作曲者自身の手によって再構成され、現在演奏される形となった。

第1楽章 Andantino – Allegretto

静かに、どこか陰りを帯びた旋律に始まり、内省的に語りかける第一主題が提示される。続く第二主題は皮肉的で歯切れの良いリズムによって演奏され、その後ピアノ独奏による長大なカデンツァが登場する。このカデンツァでは、高速で鍵盤の上を駆け回るアルペジオや和音の跳躍などが印象的であり、全曲の中でも極めて演奏困難な部分である。その超絶技巧に注目されることが多いが、魂の叫びのようなドラマティックな音楽は、聴く者の心を強く揺さぶる。強烈な和音の連打を経てオーケストラと合体したのち、再び冒頭の主題が現れて曲を終える。

第2楽章 Scherzo

休む間もなく始まるこの楽章は、ピアノによって無窮動的に16分音符が刻まれ続け、異様な緊張感に満ちている。ピアノは終始休むことなくオクターヴのユニゾンによる音型が繰り返され、強い推進力を生み出している。

第3楽章 Intermezzo

重厚で皮肉めいた行進曲風の音楽が特徴的であり、低音域を中心とした不気味な響きが印象的である。粗野でありながらどこかユーモラスでもあるこの楽章には、プロコフィエフ特有の皮肉さが色濃く表れている。

第4楽章 Finale

激しいエネルギーに満ちた終楽章は、技巧的かつ劇的な展開を見せる。叙情的な瞬間を挟みつつも音楽は常に緊張感に満ちており、圧倒的なクライマックスを迎えて曲を閉じる。

本日はモーニング・コンサートにお越しいただき、誠にありがとうございます。奏楽堂の都合により会場変更となりましたが、このような形で無事に開催できますことを大変嬉しく思っております。ご尽力くださった関係者の皆様に心より感謝申し上げます。また、いつもご指導くださる先生方、今回共演してくださる皆様、日頃より支えてくださるすべての方々に心より感謝申し上げます。

（有川 記）



©K.Miura

1979年東京音楽大学指揮専攻に入学。汐澤安彦、三石精一両氏に師事。1982年東京芸術大学指揮専攻に入学。佐藤功太郎、遠藤雅古両氏に師事。ドレスデンフィル、スロヴァキアフィル、プラハ交響楽団、サンレモ交響楽団等に客演し、コンサート、オペラ両面で活動が続ける。1994年のプラハの春での佐藤しのぶコンサートは全ヨーロッパで放映された。神奈川フィルハーモニー管弦楽団名誉指揮者。他、国内外の主要オーケストラも指揮し好評を得ている。オペラ指揮者としての経験は豊かで二期会21、関西二期会、錦織健プロデュースオペラ、佐藤しのぶ「夕鶴」公演等、歌手からの信頼も厚い。NHKのFM「シンフォニー・コンサート」のパーソナリティを長年務める等バラエティに富んだ活動を行なっている。2023年からは東京芸術大学指揮科客員教授として後進の指導にもあたっている。

管弦楽：藝大フィルハーモニア管弦楽団 The Geidai Philharmonia Orchestra, Tokyo

藝大フィルハーモニア管弦楽団（2016年秋、「藝大フィルハーモニア」から改称）は東京芸術大学に所属するプロフェッショナル・オーケストラで、定期演奏会のほか、声楽科との「合唱定期」、オペラ専攻との「オペラ定期」、音楽学部「新卒業生紹介演奏会」、年末恒例の「チャリティーコンサート メサイア」（朝日新聞厚生文化事業団・朝日新聞社主催）、「台東第九公演」などを行なっている。教育面では、器楽科・声楽科学生との協奏曲等の共演および作曲科学生の作品披露を行う「モーニング・コンサート」（年13回）や、指揮科学生との演奏会・試験・演習、東京藝大ジュニア・アカデミーの生徒との協奏曲の共演などを通して、学生の演奏経験の拡充に資している。学外での活動も積極的に行っており、近年では、新国立劇場での「世界若手オペラ歌手ガラコンサート」や現代舞踊名作劇場（現代舞踊協会）の出演をはじめ、長崎県五島市、新潟県長岡市、新潟県魚沼市、秋田県秋田市でも公演を行い、いずれも好評を博した。海外では、2017年6月のチリでの4公演（日本・チリ修好120周年記念）に続き、2023年12月には、世界三大劇場の一つであるアルゼンチンのコロン劇場（Teatro Colón）からの招聘による公演で聴衆を魅了し、15分以上に及ぶスタンディングオベーションを受けた。また2024年12月には、ヴァイオリンの巨匠ジェラルド・プーレ氏と共に、ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲のCD録音を実施した。（公社）日本オーケストラ連盟準会員。



ソロ・コンサートマスター
植村 太郎

コンサートマスター
澤 亜樹 ◎
對馬 佳祐 ◎

第1ヴァイオリン

荒井 友美
生田 絵美
加藤えりな
金子 芳子
河野由里恵
佐原 敦子
菅谷 早葉
西田 史朗
前田 奈緒
増尾 朗子
高橋 渚 *
丸山 千聡 *

第2ヴァイオリン

村津 瑠紀 ○
山本 有紗 ○
清岡 優子
小暮 莉加
小杉 結
野田 良子
福井 彩花
福岡 雄也
マヤ・フレーザー
宮本 有里
加藤 綺乃 *

ヴィオラ

安藤 裕子 ○
吉田 篤 ○
阿部 哲
梶岡 弥生
中川玲美子
麻柄明日香
森 朱理
秋元 理恵 *

チェロ

羽川 真介 ○
山澤 慧 ○
寺井 創
豊田 庄吾
夏秋 裕一
松本 卓以
向山佳絵子 ○*
大友 美侑 *
城戸 春子 *
榊原 糸野 *
鈴木 穂波 *

コントラバス

赤池 光治 ○
長坂 美玖 ○
倉持 敦
小室 昌広
中村 文音 *
張 秘根 ◆

フルート

細川 愛梨
山本 葵
西邑 華梨 ◆
村上 小夏 ◆

オーボエ

戸田 智子
山田 涼子
菅原 郁弥 ◆

クラリネット

濱崎 由紀
春田 傑
久保田智巳 *
高子 由佳 *

ファゴット

坪井 祐樹
宮崎 寿理
日谷 唯斗 ◆

ホルン

谷 ひな子 ○
岡村 陽
堂山 敦史
梁川 笑里

トランペット

平山あかり
星野 朱音

トロンボーン

東川 暁洋
久保田和弥
渡邊 善行 *

ティンパニ&パーカッション

井手上 達
ニツ木千由紀
岩村 茜 *
清水 太 *
宮垣 輝希 ◆

チューバ

久保 和憲 *

チェレスタ

小梶 由理 *

ハープ

加美山 舞 ◆

楽団長

福中 冬子

事務局長

酒井 敦

事務局長次

小宮山雄太（チーフ・ステージマネージャー）
小久保綾子（チーフ・ライブラリアン）

インスペクター

葛谷 拓摩

アシスタント・ステージマネージャー

森本 直通
徳永 芽久

ステージスタッフ

神山 巧弥

ライブラリースタッフ

安田 沙織
廣田 碧
小林 世佳

庶務

野村 智行
松井 勝幸

◎：コンサートマスター
（本公演）
○：首席奏者
*：賛助出演
◆：本学学生

発行：2026年5月21日（木）東京芸術大学
編集：東京芸術大学音楽学部
〒110-8714 東京都台東区上野公園12-8
お問い合わせ：東京芸術大学演奏芸術センター
TEL 050-5525-2300
※無断転載・複写・引用などを禁じます